作家論

藤田敏八の位置づけについて

吉村英夫　映画評論家

藤田敏八は、三重県映画史のなかで、衣笠貞之助、小津安二郎とならんで、その中核をなす映画作家であるとの位置が確立したかに思える。

三重県が生んだ映画人が、その風土性のなかで論じられることなど戦後かなりたってもなかった。そもそも彼らが、どこで生まれて育ったかなどは話題としても成立しなかったように思う。

一九九八年の藤田一周忌命日に、四日市市文化会館で藤田の実弟とその友人たちの努力で、「藤田敏八映画フォーラム」が開催されたとき、三重県という意識を中心においた映画史の軸足が動いたように思える。藤田追悼で中央から、いわば思いもかけぬ大物の映画人十人ほどがやってきて、関係者を驚かせた。その時の様子は他の誰かが語っているから省略する。

藤田の位置づけがさらに決定的になったのは、二〇〇三年に開催の小津安二郎生誕一〇〇年の三重映画フェスティバルとの関わりからである。その前年、映画祭準備のための記念出版『巨匠たちの風景』（伊勢文化舎）が、明確に、小津と衣笠と藤田を三重県輩出監督の三本柱として位置づけ、フェスティバルで三人の作品が上映された。以後四日市市が藤田をも含む映画文化振興に、それなりの財政出動をしたことも忘れてはならない。二〇一二年に林久登が『映画監督藤田敏八』（編集プロダクション映芸）を刊行し、さらに藤田の位置は確固たるものになった。

衣笠が生まれたのは、奇しくも日本で映画が最初に上映された一八九六年であるが、彼が故郷亀山を出奔して映画の世界に身を投じる一九一七年が、いわば人物三重県映画史の始まりといえよう。その時、小津は宇治山田中学の二年生であり、映画の魅力にとりつかれた頃である。やがて小津も、関東大震災の年に映画界に入る。一九三六年に松竹は、小津の

本拠地となる大船撮影所に移るが、その移転費用は、前年に衣笠が長谷川一夫主演『雪之丞変化』で、松竹はじまって以来の大ヒットをさせ、その利益で捻出されたというのも一つの縁であろう。

衣笠は、亀山の家と家族を捨てなければ、映画の世界の人となれなかった。だが結局は、「家」的なものと決別できなかった。たとえば西欧で最初に上映された日本映画である傑作『十字路』（一九二八　ベルリン上映の題名は『ヨシワラの影』だという。西洋でも有名だった遊郭を無理に組み込んだのである）は、時代劇ながら、姉と弟の愛情を哀しく歌いあげたもので、家と結びつくのはあきらかである。衣笠のその後の新派的映画も家族を中心とした義理と人情の世界である。遺作となった、『小さな逃亡者』（一九六六）は、父を訪ねてソビエトまで旅をする少年の話である。衣笠が、晩年、亀山に「故山遠慕」と顕彰碑に刻んだのも、衣笠の家族への思いと重なる。

小津の家族映画については、もう言葉を費やさずともよかろう。小津映画のほぼすべてが「家族」をテーマにしている。結婚をしなかった小津にとって、ある意味で不思議なことではあるが、それへの渇望をもふくめて「家族」こそが、彼の映画世界そのものであった。松阪に安定した「家」があったことと無縁ではなかろう。家族が人間世界の基本であるとする信条と心情は、多くの映画人と共通するものの、日本映画史で小津映画は突出している。起伏の少ない伊勢平野を、小津映画の特徴と結びつけた藤田明「平野の思想」（二〇一〇　ワイズ出版）の提起も、映画作家の地域性や風土性とを結びつけて論じる契機となった。（同時に、小津と三重県ということで、その先駆を担った佐藤忠男―藤田明―柳瀬才治の果たした役割は、藤田の同著が記録として遺しており、貴重である）。

さて、藤田敏八といえば、「家族」こそ、諸悪の根元であった。

秋吉久美子が主演する『赤ちょうちん』『妹』『バージンブルース』（いずれも一九七四）は、夫婦、兄妹、女＆中年男が、家族ごっこのようなことをしているうちに、それぞれの関係が解体していく。およそ家や地域への定着とは縁遠い。『スローなブギにしてくれ』（一九八一）も『ダブルベッド』（一九八三）も、いとも簡単に家族を捨てる。それが人間解体につながるかもとわかっていながら、「家」には安住できないし、「家族」との結びつきを拒否する。家族とは人間存在

にとって負の象徴でしかない。藤田の場合、私生活での破滅型ともつながる。

だが、藤田の場合、衣笠と小津の家族への渇望感やそこに求める充足感とは、逆の志向をすることで、そこから「家族とは何か」という問題を裏から提起しているともいえる。人間が家族を基礎単位として、その歴史を創ってきたことへの、絶望的な反抗と、映像を通じての実践が藤田にはあったのかもしれない。

いずれにしても、三重県を代表する映像作家三人が、家庭と家族を真ん中に置いて、その肯定と否定の確執を描き続けたことは興味深い。日本も世界も、すべての人間が家族に最大限こだわり続けて生きる歴史をもっていると言ってしまえば、その肯定も否定も、宇宙的なもののなかでは同じ意味しか持たないのかもしれないが、それを言ってはおしまいである。ともあれ、家族という視点で三重県の映画史を思うとき、こんなことが思い浮かんでくる。